自尊感情の諸側面 Ⅱ
―潜在的自尊感情―
Facets of Self-Esteem Ⅱ:
Implicit Self-Esteem

卜部　明
URABE Akira

自尊感情については現在様々な観点から研究されているが、そのうちのひとつは潜在的自尊感情である。本稿では、国内で行われた潜在的自尊感情に関する研究を概観することを目的とした。潜在的自尊感情の測定方法はいまだ確立されていないが、IAT（Implicit Association Test）を用いた研究が最も多かった。顕在的自尊感情および潜在的自尊感情それぞれの高低と、様々な心理状態との関連について検討されている。具体的には、抑うつや不安などの否定的感情、パーソナリティ障害傾向、攻撃性、内集団ひいき等々、広範囲にわたる。今回収集した研究のほとんどは過去10年以内のものであり、今後の研究の蓄積が期待される。

キーワード：潜在的自尊感情、顕在的自尊感情、IAT (Implicit Association Test)

はじめに

自尊感情は心理学の研究テーマとして最も人気のあるもののひとつであり、これまで多数の研究が行われている (Zeigler-Hill, 2013)。自尊感情はかつて高低の次元でとらえられていたが、Kernis et al. (1989) が安定性という次元を取り入れて、それまでとは異なる観点で実証的研究が行われるようになり、自尊感情研究は新たな段階に入ったといえる。Kernis (2003) は、高い自尊感情（high self-esteem）と最良の自尊感情（optimal self-esteem）は別のものであるとする。高い自尊感情には脆いもの（fragile）と安定したもの（secure）があり、それを分ける要因として、防衛的であるか純粋であるか、随伴的であるか本物であるか、不安定であるか安定的か、潜在的な自己価値の感情と一致しているかなどを挙げている。

Kernis (2003) の指摘には、自尊感情をとらえる重要な観点が示されている。卜部（2020）は状態自尊感情および自尊感情の安定性をキーワードとして国内の研究を概観しているが、本稿においては、潜在的自尊感情をキーワードとして、国内の研究を概観することを目的とする。論文検索にあたっては、CiNii および J-STAGE を用いた。

顕在的自尊感情と潜在的自尊感情

自尊感情尺度として最も広く使われてきたのは、Rosenberg (1965) のものである。これは自尊感情について直接質問する形式をとる。回答者は、質問に対して意識的に答えることになる。Rosenberg (1965) 尺度のような自己申告式の方法で測定される意識レベルでの自尊感情は、顕在的自尊感情 (explicit self-esteem: 以下、ESE とする) と呼ばれる。

それに対して、無意識的なレベルでの自己に対する評価を測定しようとする方法が開発されている。自分では気づいていない自己価値の感情を人がもっているという考えは、新しいものではなく、Freud に遡る（Kernis, 2003）。無意識的なレベルでの自尊感情は潜在的自尊感情 (implicit self-esteem: 以下、ISE とする) と呼ばれる。

ESE と ISE は弱い相関を示すのみである（Dehart et al., 2013）。そこで両者の高低、不一致がひとつのテーマとなる。ESE と ISE の両者が高いものは安定的な高自尊感情であるが、ESE が高く ISE が低いものは防衛的で、脆い高自尊感情である（Jordan et al., 2003）。一方で、ESE と ISE のレベルが不一致である（どちらか一方が高く、もう一方が低い）ことは心身の健康レベルと関わることが見出されている（Zeigler-Hill et al., 2010）。ESE と ISE の両者が様々な心理的不適

応に関わっていることが示唆され、特にISEがどのような役割を果たしているかは新しい興味深いテーマである（Dehart et al., 2013）。

ISEの測定

Zeigler-Hill et al. (2010) は、ISEの測定方法として11の方法を示しているが、それらは２つに大別できる。連合に基づくもの (association-based) と間接的なもの (indirect) である。連合に基づくものとして潜在連合テスト (Implicit Association Test: IAT) がある。これはもともとパソコン（以下、PCとする）を用いる方法だが、画面上に次々と提示される刺激語の分類課題を通じて、参加者の潜在的な特性や態度を測定する手法である。インターネット上で公開されており、どのようなものか確認できる（注）。間接的なものとして、name-letter task (NLT, Nuttin, 1985) が知られている。これは自分の名前のイニシャル文字を他の文字よりも好む程度を指標とするものである。Kitayama & Karasawa (1997) は、日本人大学生を対象とし、ひらがなを用いて調べた結果、同様の効果を確認している。また、誕生日の数字について調べたところ、誕生日の数字を好む傾向が見出されている。

今回収集した論文の中で（ISE測定方法に関する論文を除き）、使われていたISEの測定方法は、IATが13（PC版10、紙筆版３）、NLTが７、星座選好が２、名前選好が１、GNAT（The Go/No-go Association Test）が１であった。星座選好は12星座に対する好意度を評定してもらい、自分の星座を好む程度を指標とする方法、名前選好はイニシャルではなく、名前（姓・名・フルネーム）を好む程度を指標とする方法で、NLTと同じタイプのものである。GNATは、Nosek & Banaji (2001) によって開発された、潜在的態度を測定する方法で、連合に基づくものである。これまでに様々なISE測定方法が開発されているが、どの方法が最も良いものであるかはいまだ確立していない。

ISE測定方法に関する研究

国内で行われたISEの測定方法に関する研究を表１にまとめた。藤井ら（2010）は、紙筆版IATを作成し、PC版との相関を確認している。紙筆版は、PCなどの設備が必要なく、集団でも実施できることがメリットして挙げられている。古谷ら（2019）は、IATに言語関係の行動分析的アセスメントを組み合わせて開発されたImplicit Relational Assessment Procedure (IRAP: Barnes-Holmes et al., 2006) によってISEを検討した。

Gebauer et al. (2008) は、「あなたは自分のフルネームがどれだけ好きですか」という質問によってISEを測定する方法を提案しているが、稲垣ら（2018b）は、姓・名・フルネームのそれぞれについてどれくらい好きかを尋ね、IATやESEとの相関を調べている。

横嶋ら（2017）は、児童用紙筆版IATを開発している。妥当性の検討のため、得点上位および下位児童について、学級担任に「不安」「攻撃性」「自律性」についての評定を求め、インタビューを行っている。また、横嶋ら（2020）は、児童用タブレットPC版IATを開発している。

表１　潜在的自尊感情の測定方法に関する研究

著者 年 対象者	目的	方法	主な結果
藤井ら 2010 大学生・ 大学院生	紙筆版IATの作成。	Greenwald et al. (2000) を参考にしたPC版との比較。	紙筆版とPC版との相関は、r=.58（p<.05）であった。 紙筆版、PC版ともに、社会的望ましさとは相関がみられなかった。
古谷ら 2019 大学生	IRAPを用いて、ISEを測定し、影響する要因を検討。	IRAP2010日本語版ソフトウェア。	IRAPにおいても、IATを用いた先行研究と同様に、自己肯定的、そして他者否定的な結果を示した。自己を肯定的に評価するだけでなく、他者を否定的に評価することに、ISEを高める機能があることが示唆された。
稲垣ら 2018b 大学生	Gebauer et al. (2008) による「名前の選好」が本邦で使用可能か検討。	Gebauer et al. (2008) 名前の選好尺度。 IAT（藤井ら、2010）。	姓・名・フルネームのぞれぞれでみると、ESEは、フルネームの選好と有意な正の相関、姓の選好と有意傾向の正の相関がみられた。IATとは相関がなかった。男女別でみると、男性のみ、フルネームの選好とIATに有意な正の相関がみられた。

横嶋ら 2017 小学生	児童用紙筆版IATの開発を行い、信頼性と妥当性を確認。	Jordan et al. (2003)、他を参考にした。	ISE前半と後半の得点に差はなく、かつ有意な正の相関がみられた。Rosenbergの尺度とは無相関であった。 高いISEをもつ児童は、不安が低く、攻撃性が低く、自律性が高いと教師から評定される傾向にあり、低いISEの児童はその逆であった。
横嶋ら 2020 小学生	児童用タブレットPC版IATを作成し、信頼性と妥当性を検討。	児童用紙筆版自尊感情潜在連合テスト（横嶋ら、2017）を参考にした。	再検査による級内相関係数およびPearsonの相関係数を求めたところ、それぞれr=.49-.52、r=.50-.53であった。紙筆版とタブレットPC版のPearsonの相関係数は、r=.47-.61であった。

ISEに関する研究

表２には、国内で行われたISEに関する研究をまとめた。

川崎ら（2010）および藤井ら（2014c）は、自己愛との関連を検討している。自己愛について、マスクモデルと呼ばれる考え方があるが、それはFreud、Kohut、Kernbergなどの精神力動論に起源がある（Bosson et al., 2008）。自己愛者は、内面の奥深くにある劣等感を表面的な誇大性でマスクするというものである。自尊感情研究においては、ISEが低くESEが高い場合に自己愛傾向が高くなると予測されたが、Bosson et al., (2008) によるメタ分析ではこの仮説は支持されなかった。川崎ら（2010）、藤井ら（2014c）においてもマスクモデルを支持する結果ではなかった。藤井ら(2014c)は、自己愛を３つの下位尺度に分けて分析したところ、「自己主張性」においてESEとISEの交互作用がみられ、自己愛を複数の下位尺度から構成される概念として捉えることが妥当であると主張している。

アメリカ精神医学会（2013）による診断基準DSM-５では10類型のパーソナリティ障害が定義されているが、そのうち自己に関する診断基準が含まれている３つの障害について、市川ら（2015）は、ESEとISEの乖離との関連を調べている。自己愛パーソナリティ障害傾向は、両自尊感情のレベルや乖離との関連はみられなかった。境界性および回避性パーソナリティ障害傾向は、ESEよりもISEの方が高く、両自尊感情の解離が大きいほど、強かった。

津田ら（2012）は、パラノイアとの関連を検討している。パラノイアの生起メカニズムについて２つの仮説がある（津田ら、2012）。「防衛モデル」では、低いISEが意識化されることに対する防衛であるとし、「表出モデル」では、低いESEをそのまま反映したものであるとする。非臨床群を対象とした研究では、防衛モデルではなく表出モデルが支持されており、ESEとパラノイアとの間には負の相関がみられている。津田らの結果は、表出モデルを支持するものであった。

自尊感情とうつの関連は以前から興味をもたれてきたテーマである。片受ら（2016）は、ESEおよびISEの高低と抑うつとの関連を検討している。ESEとISEが不一致の場合、抑うつが高くなると予測したが、関連はみられなかった。

藤井（2014a）は、ESEとISEの不一致と抑うつ・不安、孤独感の関連を検討している。抑うつ・不安には、ESEとISEの交互作用が見られた。孤独感にはESEが影響していた。また、藤井（2016）は、藤井（2014a）にデータを加え、日本と韓国の大学生を対象として検討している。ESEは韓国の方が高かったが、ISEは差がなかった。日韓ともに、孤独感、抑うつ・不安などの感情に対して、ESEとISEの交互作用が有意または有意傾向であった。またESEとISEの不一致の大きさや方向性に関しては、ESEに比してISEが高いほど、それらの感情が高いことが示された。

他者の能力を批判的に評価・軽視することを通した無意識的なプロセスによって、現実とは異なる仮想的有能感が生じると考えられる（速水ら、2004）が、その他者軽視とISEの関連を検討した研究が２つある。小塩ら（2009）では、ISEの測定に紙筆版IATとPC版IATを用いて比較したところ、ほぼ同じ結果であった。他者軽視は、ISEと正の相関がみられた。ESEが低く、ISEが高いものがもっとも他者軽視を行う傾向にあることが示された。また、稲垣ら（2018a）では、ESEおよびISEの高低に加えて、両自尊感情の不一致の大きさと方向性という観点を加えて、他者軽視について検討している。ESEおよびISEの高低と他者軽視との関連については、小塩ら（2009）と同様の結果が見られている。また両自尊感情の不一致の大きさと方向性については、不一致の大きさが影響していた。

Jordan et al. (2003) では、ESEが高いものにおいて、ISEが低いものは高いものに比べて、内集団ひいきを行い、認知的不協和の解消を図るという結果がみられ

ている。内集団ひいきとISEの関連を調べた研究が２つある。原島ら（2007）は、ESEとISEの高低が内集団ひいきに及ぼす影響を検討している。メタ分析では、実際に存在する集団よりも実験室で操作的に作られた集団を扱った場合の方が、集団の地位差による内集団ひいきが強くみられることが指摘されていることを踏まえて、現実的な状況設定においても先行研究と同様に内集団ひいきがみられるかを検討した。３つの場面のうち２つ（奨学金の分配、アルバイト代の分配）について、予測通りの結果であったが、ひとつ（飲み会代の負担）は異なる結果となり、その違いは明らかになっていない。また、藤井(2014a)では、原島ら(2007)と同様の３場面を設定し、ISEの測定方法は異なっていたが、原島ら（2007）と一致する結果であった。

岡本（2015）は、ISEおよびESEの高低と攻撃性との関連を検討している。ISEとESEの差と攻撃性の関連についてみると、「積極的行動」以外、どの攻撃性においてもISE優位群が最も攻撃性が高く、ESE優位群が最も攻撃性が低かった。また、ISEとESEの高低に関しては、攻撃性の方向や表出の有無に違いが見られ、一様ではなかった。

川西ら（2016）は、ESEおよびISEがいじめに及ぼす影響を検討している。いじめと自尊心の関係についてはこれまでも検討されてきたが、結果は一様ではない。大学生を対象に、場面想定法によりいじめをどのように認知するかを調べるとともに、いじめの経験を尋ねた。両自尊感情が高いものは、加害者に対してより否定的なとらえ方をすることが示された。低ESE・低ISE群は、低ESE・高ISE群より、加害者被害者ともに、「動揺している」ととらえていた。いじめの影響については、ESEの低い者は、高ESE・高ISEのものより、いじめを経験すると他者に敏感に反応するようになっていた。

大橋ら（2003）は、否定的内容の自己開示を受容的に聞かれる群と非受容的に聞かれる群を設定し、自己開示の前後でESE、ISE、自己受容・他者受容得点を比較している。その際、公的自己意識の高低による違いを検討した。ISEを測定するために、GNAT（Nosek & Banaji, 2001）を用いている。GNAT得点の分析からは、公的自己意識が高い人で有意な傾向差がみられた。ESE得点には有意差がなかった。自己受容得点は有意差がみられた。また公的自己意識の影響もみられた。

認知的方略とは、重要な状況に直面した際の準備や心構えのことであるが、それは、過去のパフォーマンスに対する認知（過去認知）と将来のパフォーマンスに対する期待（将来期待）の高低よって４つに分類される（光浪、2012）。清水ら（2018）は、過去認知は高いが将来期待が低いもの（防衛的悲観主義者）が、過去認知も将来期待も高いもの（方略的楽観主義者）と同程度に高いパフォーマンスを発揮する理由として、ISEが高いのではないかと考え、検討した。その結果、防衛的悲観主義者は方略的楽観主義者に比べて、ESEは低いものの、ISEは同程度に高いことが示された。ESEが低いためパフォーマンスに対して不安を感じるが、ISEが高いがゆえに、成功の見通しを持つことができ、積極的な準備に繋がる可能性があると指摘する。

藤井ら（2014b）は、シャーデンフロイデ（他者の不幸を喜ぶ感情）に対して、ESEおよびISEが与える影響を検討した。その結果、対象者の社会的地位が高い場合、ISEはシャーデンフロイデを促進する可能性が示唆された。ESEとの関連、ESEとISEの不一致との関連はみられなかった。

尾中（2005）は、ESEおよびISEの高低が防衛機制にもたらす影響を検討している。両自尊感情をそれぞれ高低２群に分け、それが一致している群と不一致の群で、防衛機制に違いがあるかをみたが、差はなかった。神経症的な防衛および成熟した防衛において、ESEとISEの高低による違いがみられた。

自己への脅威状況において、自己防衛的にISEが高揚することが示されている（Rudman et al., 2007）。村上（2014）は、対人的脅威の高低２条件（人前での失敗と人がいないところでの失敗）を設定し比較したところ、脅威が高い条件の方が、脅威が低い条件よりも、ISEが高かった。また、ESEについては実験の前後で有意差はなく、補償的高揚は生じていなかった。村上は、これまで研究によって結果は異なっており、脅威のどのような要素がISEの補償的高揚を引き起こすのかについて検討が必要であるとする。

潜在的エゴティズムとは、自己に対する潜在的な肯定感が自己と関連しているもの（例、自分の名前に似たもの）にも及び、自己と関連しているものを好むようになる傾向である（津村ら、2016）。Jones et al. (2004) は、参加者の名前と数字の評価的条件づけを行い、自己と条件づけられた数字を付与された人物を好むようになることを示した。津村ら（2016）は、Jones et al. (2004) の追試を行った。ISEの高い者の方が、自己関連付けされた対象者を魅力的だと評価した。つまり潜在的エゴティズムはISEと関連することを示

す結果であった。

迎合性は、取調べにおいて、虚偽自白や誤った供述を引き出す危険因子のひとつといえる（丹藤、2018）。取調べにおける迎合性の基盤は２つあり、ひとつは他者に気に入られたいという欲求であり、もうひとつは他者との対立や葛藤を避けたいという欲求である。この２つは、自尊感情や不安と関連する。丹藤（2018）は、ISE と ESE の不一致という観点から、迎合性との関連を調べた。ISE が高い場合、ESE が低いほど迎合性が高くなることが示された。自尊感情の不一致の観点では、ISE が高く、ESE が低いものが他と比べて、迎合性が高かった。

取調べ被誘導性とは、誘導的質問への影響の受けやすさであり、誤情報を受容する傾向のことであるが、自尊感情との関連について研究結果は一貫していない。丹藤（2020）では、被誘導性および迎合性と ESE と ISE の不一致の関係を検討した。被誘導性は ESE と ISE の不一致と関係がみられなかった。迎合性は、ISE が高く ESE が低いものは、ISE および ESE ともに高いものより迎合性が高かった。

表２　潜在的自尊感情に関する研究

著者 年 対象者	目的	自尊感情測定方法	主な結果
藤井 2014a 大学生	ESE・ISE の不一致と否定的感情および内集団ひいきとの関連を検討。	NLT（Nuttin, 1985）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ESE 高群において、ISE 低群は高群より、抑うつ・不安が高かった。ISE 高群において、ESE 低群は高群より、抑うつ・不安が高かった。孤独感は、ESE 高群の方が低群より低かった。ESE が高く、ISE が低い者は、ESE・ISE のいずれも高い者より、内集団ひいき得点が高かった。
藤井ら 2014b 大学生	シャーデンフロイデに対して、ESE・ISE の影響がみられるかを検討。	IAT（Fujii et al., 2013）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ISE と対象者の社会的地位に交互作用がみられた。ISE 高群は、対象者が社会的に有利な地位にある場合、シャーデンフロイデ得点が高く、対象者が社会的に有利な地位にある場合、ISE 高群は低群より、シャーデンフロイデ得点が高かった。
藤井ら 2014c 大学生	ESE・ISE の不一致と自己愛との関連を検討。	SE-IAT（藤井ら、2010）。Yamaguchi et al.（2007）自尊感情尺度。	自己愛尺度全体は、ESE が高いほど高かった。自己愛の下位尺度「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」も同様であった。「自己主張性」は、ESE 高群では、ISE 低群よりも高群の方が高く、ISE 高群では、ESE 低群より高群の方が高かった。
藤井 2016 大学生	ESE･ISE が抑うつ・不安や孤独感に及ぼす影響に関する日韓比較。	NLT（Nuttin, 1985）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	（日本での結果）ESE は孤独感に負の影響を示した。抑うつ・不安は、ISE が高い場合も低い場合も、ESE が低いほど、高い傾向にあった。両自尊感情の不一致の大きさと方向性について、不一致が大きいほど、ISE が優位であるほど孤独感、抑うつ・不安が高かった。
原島ら 2007 大学生	ESE・ISE が内集団ひいきに及ぼす効果を検討。	IAT（Greenwald et al., 2000）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	３つの場面（奨学金、アルバイト代、飲み会代）のうち、２つの場面で、ESE が高く、ISE が低い者が最も強く内集団ひいきを示していた。
市川ら 2015 大学生・大学院生	パーソナリティ障害と ESE・ISE 間の乖離との関連を検討。	IAT（Greenwald et al., 1998）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	境界性および回避性パーソナリティ障害傾向は、ISE の方が高く、両自尊感情間の乖離が大きいことと関連していた。一方、自己愛性パーソナリティ障害傾向は、自尊感情のレベルや両自尊感情の乖離との関連はみられなかった。
稲垣ら 2018a 大学生・大学院生	ESE・ISE の不一致と他者軽視の関連を検討。	IAT（藤井ら、2010）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ESE と ISE の交互作用が有意であり、ESE が低い場合、ISE が高いほど他者軽視が高く、ISE が高い場合、ESE が低いほど他者軽視が高かった。また、ESE と ISE の不一致が大きいほど他者軽視傾向が高かった。

片受ら 2016 大学生	ISE・ESE の高低と抑うつとの関連を検証。	紙筆版 IAT。 Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ESE と ISE のそれぞれを高群低群に分け、全体を 4 群として一元配置の分散分析を行った。ESE 高群は低群より、抑うつ得点が低かった。ISE と ESE の不一致は、抑うつと関連がなかった。
川西ら 2016 大学生	ESE・ISE といじめとの関連性を検討。	IAT（Greenwald et al., 2003; 小塩ら、2009）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ESE と ISE のそれぞれを高群低群に分け、全体を 4 群に分けた。高 ESE 高 ISE 群は、低 ESE 低 ISE 群より加害者を嫌う傾向がみられた。低 ESE 低 ISE は低 ESE 高 ISE 群より、加害者被害者に関わらず、「動揺している」ととらえる傾向がみられた。低 ESE 群は、高 ESE 群より、いじめを経験すると他者に過敏に反応するようになっていた。いじめ・いじめられ経験の有無で 4 群に分けたところ、ESE、ISE ともに差はなかった。
川崎ら 2010 大学生	ISE と自己愛傾向との関連を検討。	IAT（Jordan et al., 2003）。NLT（Albers et al., 2009）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	自己愛傾向に対しては、ESE の主効果のみ有意であり、ISE の主効果や交互作用はみられなかった。 ESE は、自己愛の誇大性に対して正の影響、過敏性に対して負の影響を示した。
村上 2014 大学生	対人的脅威が ISE の補償的高揚に及ぼす効果を検討。	紙筆版 IAT。 Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	他者の前で失敗するという対人的脅威が高い状況を想起した場合、周囲に人がいない場面で失敗する状況を想起した場合よりも、ISE が高かった。ESE においては、補償的自己高揚は生じていなかった。
大橋ら 2003 大学生	否定的内容の自己開示が開示者の ESE と ISE に及ぼす影響を検討。	GNAT（Nosek et al., 2001）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。Berger（1965）自己受容・他者受容に関する尺度。	自己開示を受容的に聞かれる受容群と非受容的に聞かれる非受容群を設定し、自己開示前後で比較した。 Rosenberg 尺度得点は差がみられなかった。自己受容得点は、受容群と非受容群で有意差がみられ、他者受容得点は、傾向差がみられた。GNAT によって測定される潜在的自己受容は、公的自己意識の高低によって、違いがみられた。
岡本 2015 大学生	ISE・ESE の高低が攻撃性にどのように影響を与えるかを検討。	NLT（津田ら、2012 の方法による）。 Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ISE と ESE の得点差をもとに、「潜在優位群」「差分少群」「顕在優位群」に分けて、攻撃性の下位尺度得点をみると、「対象攻撃性」において潜在優位群・差分少群＞顕在優位群、「猜疑心」において潜在優位群＞顕在優位群、「自責感」と「自己破壊行動」において潜在優位群＞差分少群＞顕在優位群であった。「積極的行動」では差はなかった。 ISE と ESE それぞれの高低によって 2 要因の分散分析を行ったところ、「積極的行動」では ISE および ESE の主効果、「対象攻撃性」では ISE の主効果、「自責感」「自己破壊行動」「猜疑心」では ESE の主効果が認められた。
尾中 2005 成人男女	ISE・ESE の高低と防衛機制との関連を検討。	IAT。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ISE と ESE それぞれを高群低群に分け、二つが同じ群にある一致群と違う群にある不一致群で比較したが、防衛機制に差はなかった。 ISE と ESE それぞれの高低により 4 群に分けて、分散分析を行った。神経症的な防衛では、低 ISE 低 ESE 群＜高 ISE 高 ESE 群・高 ISE 低 ESE 群であり、成熟した防衛では、高 ISE 高 ESE 群・高 ISE 低 ESE 群＜低 ISE 高 ESE 群であった。

小塩ら 2009 大学生	他者軽視とESE・ISEの関連を検討。	紙筆版IAT（Greenwald, 2000）。PC版IAT。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	他者軽視とISE（紙筆版、ＰＣ版とも）に有意な正の相関がみられた。ISEとESEの得点を高群・低群に分け、２要因の分散分析を行った。紙筆版IATを実施した被験者では、交互作用が有意であり、ESEが低い場合、ISEが高い者は低い者より他者軽視得点が高かった。 PC版IATを実施した被験者では、交互作用が有意であった。ESEが低い場合、ISEが高い者は低い者より他者軽視得点が高く、またISEが高い場合、ESEが低い者は高い者よりも他者軽視得点が高かった。
清水ら 2018 大学生	過去のパフォーマンスに対する認知と将来のパフォーマンスに対する期待の高低による、ESE・ISEの差異を検討。	NLT（Nuttin, 1985）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	過去認知と将来期待の高低によって、被験者を４群に分け、ESEとISE得点のそれぞれについて一要因分散分析を行った。その結果、ESEについては、過去認知高・将来期待高群が、他の３群より高かった。ISEについては、過去認知高・将来期待高群および過去認知高・将来期待低群が、過去認知低・将来期待低群より高かった。
丹藤 2018 大学生	ESE・ISEの不一致と取調べ迎合性との関連を検討。	NLT（Nuttin, 1985）。星座選好課題（津田ら、2012）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ISEが高い場合、ESEが低いほど、迎合性が高かった。ISEが低い場合、ESEによる迎合性の違いはみられなかった。高ISE・低ESE群は他と比べて迎合性が高かった。
丹藤 2020 大学生	取調べ被誘導性と迎合性について、ESE・ISEの不一致、実行機能との関係を検討。	IAT（藤井他、2014b）。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	被誘導性はESEとISEの不一致と関係がみられなかった。迎合性は、高ISE低ESE群が、高ISE高ESE群より高かった。
津田ら 2012 大学生	非臨床群におけるISE・ESEとパラノイアの関連を検討。	NLT。星座選好課題。Rosenberg（1965）自尊感情尺度。	ISEとパラノイアには有意な相関はなく、ESEとパラノイアには有意な負の相関がみられた。パラノイア高群ではESEがISEよりも低く、パラノイア低群ではISEがESEよりも低かった。
津村ら 2016 大学生	潜在的エゴティズムが対人魅力に与える影響を検討。	名前選好課題。	ISEが高い参加者において、自己と評価的条件づけされた数字を付与された人物について評価した参加者の方が、評価的条件づけされなかった数字を付与された人物について評価した参加者よりも、対象を魅力的だと評価した。

まとめにかえて

今回収集した論文は、測定方法に関するものを含めて25本だが、そのうち21本が2010年以降、つまり過去10年以内のものであり、ISE研究はわが国において新しいテーマであることがわかる。関連が調べられている変数は、うつ、不安、孤独感、自己愛、パラノイア、パーソナリティ障害、防衛機制、補償的高揚、認知的方略、シャーデンフロイデ、他者軽視、内集団ひいき、潜在的エゴティズム、攻撃性、いじめ、自己開示、迎合性など広範囲にわたる。ESEが非常に多くの変数との関わりを検討されてきていることを考慮すれば当然のことといえよう。これまで国内で行われたISE研究の数は多くない。研究の蓄積が期待される領域である。

ISEの測定方法は複数開発されているが、それらの測定法は互いに相関をほとんど示さない。Bosson et al.（2000）は、６つのISE測定法を比較しているが、そのうちイニシャル選好課題と誕生日選好課題が弱い正の相関を示しただけで、他に有意な相関は見られなかった。稲垣ら（2018b）では、名前選好とIATの相関を求めているが、姓・名・フルネームのいずれもIATとは有意な相関がみられていない。ESE（Rosenberg尺度）とは、姓で正の有意傾向、フルネームで正の有意な相関がみられた。丹藤（2018）および

津田ら（2012）では、NLT と星座選好を用いているが、両者の間に有意な正の相関がみられている。ISE の測定方法は、連合に基づくものと間接的なものに大別されるが、同じタイプの測定方法の間には、ある程度相関がみられる可能性があることが示唆される。

今回収集した論文の中でも使用頻度が高かったのは IAT と NLT であるが、収集した論文の中でこれらを同時に用いた研究はなかった。Bosson et al. (2000) ではこの両者に相関はなかったが、一方で、内集団ひいきについて検討した原島ら（2007）および藤井（2014a）では、ISE の測定方法はそれぞれ IAT と NLT であり異なっていたが、結果は一致していた。これが何を意味するのかという疑問は極めて重要である。

ISE 測定方法が相関を示さない理由について、Zeigler-Hill et al. (2010) は、４つの可能性を指摘する。① ISE が単一の、一次元の構成概念ではなく、様々な側面を測定している。②異なる認知的プロセスによる。NLT は、IAT より誕生日選好とより強い関連がみられる。③心理測定的特性が弱いことの反映である。④方法によって、ISE を測定しているものと、ISE と ESE の混合物を測定しているものがある。これらの可能性、疑問について検討することは、ISE 研究の進展のために不可欠である。

測定方法が異なれば測定されるものが違うということが問題になるのは、ISE に限らない。ESE の尺度においても指摘されてきたことである。井上（1992）は、Rosenberg (1965)、Coopersmith (1967)、Janis & Field (1959) の３尺度の相関が r=.45-.64であり、それぞれが独自の部分をもっていると考えられると指摘する。Twenge & Campbell (2001) は、Rosenberg (1965) と Coopersmith (1967) の尺度を用いて調べた、小学生から大学生までの自尊感情の変化を示しているが、尺度によってその変化に違いがある。それは測定しているものが異なる結果と考えられる。

ESE の測定に関しては、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度が、内外を問わず、最も広く使われてきた。多くの研究で用いられたことによって、さらに使用が促されることにもなる（小塩ら、2014）。ISE に関しては、これまで IAT あるいは NLT を使用した研究が多いが、それらが今後標準的な測定方法になるのであろうか。

Rosenberg（1965）尺度の邦訳版は複数あり、回答の方法も統一されていない。ISE の測定方法としては、今回収集した研究の中では IAT が最も多く使われていたが、IAT も手続き、刺激語などが研究により異なる。PC 版と紙筆版があり、両者は有意な相関を示しているが（藤井ら、2010；横嶋ら、2020）、必ずしも高い値でなく（r=.47-61）、IAT で測定しているとはいえ、それぞれ測定されているものが同じとはいえないことも問題点として挙げられる。

また、ESE と同様に、ISE でも特性（trait）と状態（state）の二つのレベルが考えられる（Bosson, 2006）。村上（2014）が ISE の補償的高揚を取り上げているが、ISE は文脈に依存し影響されやすいという結果もある（Zeigler-Hill et al., 2010）。ESE 研究において、特性と状態は異なる尺度、手続きを用いて測定されている。ISE 研究においても、今後、特性と状態を区別して扱うことになるとすれば、その測定方法についても検討が必要である。

かつて、理想自己と現実自己の差異は不適応に関わるとの指摘が臨床家からなされ、その関係は大きな関心を集め、様々な研究が行われた（Ogilvie, 1987）。その結果、多くの知見が得られた。心の中には、「なるかもしれない」「なりたい」「なりたくない」等など様々な自分の姿（possible selves）が存在し、それらは自分の今後の行動に影響を与え、現在の自己を評価判断する手がかりとなること（Markus & Nurius, 1986）。理想には「あるべき姿」と「ありたい姿」が含まれ、「こうあるべき」自己像と現実のずれは不安を生み、「こうありたい」自己像と現実のずれはうつに関わること（Higgins, 1987）。理想自己が達成されたら新たな理想自己が作られること、肯定的な理想像と現実の自己像のずれよりも、なりたくない否定的な自己像と現実のずれの方が、人生の満足度と相関が高いこと（Ogilvie, 1987）。

研究の進展により理想自己と現実自己に関する理解が広く深くなり、「理想自己と現実自己のずれが適応に関わる」という言葉では説明しきれない多くのことが明らかとなった。ISE と自己愛傾向との関係は、臨床の領域で語られてきたこともあり、注目を集めているテーマの一つである。今回収集した中でも３本の論文で扱われている。これまでは、低い ISE と高い ESE をもつことが自己愛と関わるという仮説であったが、Bosson et al. (2008) のメタ分析では支持されなかった。藤井（2014c）では、自己愛の下位尺度において ESE と ISE の交互作用がみられている。今後研究の進展によって理解が進み、臨床家の語ってきた言葉の意味がより明確なものになることを期待したい。そのプロセスにおいて、ISE とは何か、自己愛とは何かという問題が改めて問われることになるであろう。

自尊感情は、ISE をはじめ、複数の観点から捉え直されることにより、これまで行われてきた数多くの ESE 研究について改めて捉え直す必要性が生じた。自尊感情が高いことは良いことであるというシンプルな話ではなくなり、自尊感情に関する疑問が減少することはないが、研究の進展によって得られる知見が、メンタルヘルスを維持し、適応を促す一助となることを期待したい。

注：IAT がどのようなものかは、下記で実際に体験できる。https://implicit.harvard.edu/implicit/

参考文献

Albers, L., Rotteveel, M., & Dijksterhuis. A. (2009) Towards optimizing the name letter test as a measure of implicit self-esteem. Self and Identity, 8, 63-77.

American Psychiatric Association (2013) Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.（アメリカ精神医学会　高橋三郎・大野裕（監訳）（2014）DSM- 5 精神疾患の診断・統計マニュアル、医学書院）

Barnes-Holmes, D., Barnes-Holmes, Y., Power, P., Hayden, E., Milne, R., & Stewart, I. (2006) Do you really know what you believe? Developing the Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP) as a direct measure of implicit beliefs. The Irish Psychologist, 32, 169-177.

Berger, E. M. (1952) The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. The Journal of Abnormal and Social Psychology, 47, 778-782.

Bosson, J. K. (2006) Conceptualization, measurement, and functioning of nonconscious self-esteem. In M. H. Kernis (ed.) Self-esteem issues and answers. (pp. 53-59). New York, NY: Psychology Press.

Bosson, J. K., Lakey, C. E., Campbell, W. K., Zeigler-HIll, V., Jordan, C. H., & Kernis, M. H. (2008) Untangling the links between narcissism and self-esteem: A theoretical and empirical review. Social and Personality Psychology Compass, 2, 1415-1439.

Bosson, J. K., Swann, W. B. Jr., & Pennebake, J. W. (2000) Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? Journal of Personality and Social Psychology, 79 (4), 631-643.

Coopersmith, S. (1967) The antecedents of self-esteem. San Francisco: W. H. Freeman and Company.

Dehart, T., Peña, R., & Tennen, H. (2013) The development of explicit and implicit self-esteem and their role in psychological adjustment. In V. Zeigler-Hill (ed.), Self-esteem (pp. 99-123). New York, NY: Psychology Press.

藤井勉（2014a）顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連、心理学研究、85（1）、93-99.

藤井勉（2016）大学生の適応に関わる諸変数に及ぼす顕在的・潜在的自尊心の影響の検討―日韓比較を通じて―、東京女子大学比較文化研究所紀要、77、103－123.

藤井勉・澤田匡人（2014b）自尊感情とシャーデンフロイデ、感情心理学研究、21（3）、114-123.

Fujii T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2013) Test-retest reliability and criterion-related validity of the Implicit Association Test for measuring shyness. IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, E96-A, 1768-1774.

藤井勉・澤海崇文・相川充（2014c）顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛―自己愛の３下位尺度との関連から―、感情心理学研究、21（3）、162－168.

藤井勉・上淵寿（2010）紙筆版 IAT を用いた自尊心査定の試み、東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅰ、61、113-120.

古谷大樹・竹内康二（2019）言語関係の評価を通じて測定した潜在的自尊感情、感情心理学研究、26（2）、47-51.

Gebauer, J. E., Riketta, M., Broemer, P., & Maio, G. R. (2008) “How much do you like your name?” An implicit measure of global self-esteem. Journal of Experimental Social Psychology, 44, 1346-1354.

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000) Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. Journal of Personality and Social Psychology, 79, 1022-1038.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. Journal of Personality and Social Psychology, 74, 1464-1480.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the implicit association test: Ⅰ. An improved scoring algorithm. Journal of Personality and Social Psychology, 85, 197-216.

原島雅之・小口孝司（2007）顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす影響、実験社会心理学研究、47（1）、69-77.

速水敏彦・木野和代・高木邦子（2004）仮想的有能感の構成概念妥当性の検討、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学専攻）、51、1-8.

Higgins, E. T. (1987) Self-discrepancy: A theory relating self and affect. Psychological Review, 94 (3), 319-340.

市川玲子・望月聡（2015）パーソナリティ障害と顕在的・潜在的自尊感情間の乖離との関連、心理学研究、86（5）、434-444.

稲垣勉・澤田匡人（2018a）顕在的・潜在的自尊感情の不一致と他者軽視の関連－不一致の「大きさ」と「方向」も含めて、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、27、221-229.

稲垣勉・上原依子（2018b）潜在的自尊心の指標としての「名前の選好」：潜在連合テストとの相関関係からの検討、鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編69、143-153.

井上祥治（1992）セルフ・エスティームの測定法とその応用、遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編、セルフ・エスティームの心理学、ナカニシヤ、26-36.

Janis, I. L., & Field, P. B. (1959) Sex differences and factors related to persuasibility. In C. I. Hovland & I. L. Janis (eds.), Personality and persuasibility (pp. 55-68). New Haven, CT: Yale University Press.

Jones, J. T., Pelham, B. W., Carvallo, M., & Mirenberg, M. C. (2004). How do I love thee? Let me count the Js: Implicit egotism and interpersonal attraction. Journal of Personality and Social Psychology, 87 (5), 665-683.

Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003) Secure and defensive high self-esteem. Journal of Personality and Social Psychology, 85, 969-978.

片受靖・濱洋子（2016）潜在的・顕在的自尊心の高低と抑うつとの関連について、立正大学心理学研究所紀要、14、101-108.

川西千弘・土井淳子（2016）顕在的・潜在的自尊心がいじめに及ぼす影響、京都京華女子大学京都京華女子大学短期大学部研究紀要、54、95-105.

川崎直樹・小玉正博（2010）潜在的自尊心と自己愛傾向との関連、パーソナリティ研究、19（1）、59-61.

Kernis, M. H. (2003) Toward a conceptualization of optimal self-esteem. Psychological Inquiry, 14, 1-26.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barday, L. C. (1989) Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. Journal of Personality and Social Psychology, 56 (6), 1013-1022.

Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997) Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. Personality and Social Psychology Bulletin, 23 (7), 736-742.

Markus, H., & Nurius, P. (1986) Possible selves. American Psychologist, 41 (9), 954-969.

光浪睦美（2012）認知的方略の違いが対人関係における動機、目標志向性および対人行動との関係に及ぼす影響、パーソナリティ研究、21（2）、124-137.

村上史朗（2014）対人的脅威が潜在的自尊心の補償的高揚に及ぼす効果、奈良大学紀要、42、181-190.

Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001) The go no/go association task. Social Cognition, 19 (6), 625-666.

Nuttin, J. M. Jr. (1985) Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. European Journal of Social Psychology, 15, 353-361.

Ogilvie, D. M. (1987) The undesired self: A neglected variable in personality research. Journal of Personality and Social Psychology, 52 (2), 379-385.

大橋早苗・潮村公弘（2003）否定的内容の自己開示が開示者の自尊心に及ぼす影響―顕在的自尊心と潜在的自尊心の測定―、人間科学研究、10（2）、33-48.

岡本瑞希（2015）顕在的・潜在的自尊心の差異と攻撃性との関連、追手門学院大学心理学論集、23、1-9.

尾中航介（2005）潜在的自尊心に関する一考察―顕在的自尊心との一致・不一致が防衛機制にもたらす影響―、青山心理学研究、５、149-152.

小塩真司・西野拓朗・速水敏彦（2009）潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連、パーソナリティ研究、17（3）、250-260.

小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並木努・脇田貴文（2014）自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響―Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析、教育心理学研究、62、273-282.

Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Rudman, L. A., Dohn, M. C., & Fairchild, K. (2007). Implicit self-esteem compensation: Automatic threat defense. Journal of Personality and Social Psychology, 93 (5), 798-813.

清水陽香・中島健一郎（2018）防衛的悲観主義者は本当に自尊心が低いのか？―潜在的自尊心に着目した検討、パーソナリティ研究、27（1）、21-30.

丹藤克也（2018）顕在的・潜在的自尊感情の不一致と取調べ迎合性との関連、人間学研究論集、７、17-27.

丹藤克也（2020）取調べ被誘導性と迎合性における自尊感

情の不一致および実行機能の役割、愛知淑徳大学論集、心理学部篇、10、25-37.
津田恭充・伊藤義美（2012）潜在的自尊心および顕在的自尊心とパラノイア：イニシャル選好課題と星座選好課題を用いた検討、対人社会心理学研究、12、103-109.
津村健太・村田光二（2016）潜在的エゴティズムが対人魅力に与える影響―潜在的自尊心による調整効果の検討、パーソナリティ研究、24（3）215-217.
Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2001) Age and birth cohort differences in self-esteem: A cross-temporal meta-analysis. Personality and Social Psychology Review, 5 (4), 321-344.
卜部明（2020）自尊感情の諸側面―状態自尊感情・自尊感情の安定性―、国立音楽大学研究紀要、54、1-12.
Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (2007) Apparent universality of positive implicit self-esteem. Psychological Science, 18 (6), 498-500.
横嶋敬行・大上遊路・賀屋育子・山崎勝之（2020）児童用のタブレットＰＣ版セルフ・エスティーム潜在連合テストの開発、感情心理学研究、27（2）、61-66.
横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之（2017）児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発、兵庫教育大学教育実践学論集、18、1-13.
Zeigler-Hill, V. (2013) The importance of self-esteem. In V. Zeigler-Hill (ed.), Self-esteem (pp. 1-20). New York, NY: Psychology Press.
Zeigler-Hill, V., & Jordan, C. H. (2010). Two faces of self-esteem: Implicit and explicit forms of self-esteem. In B. Gawronski & B. K. Payne (eds.), Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications (pp. 392-407). New York, NY: Guilford Press.